

〈座談会〉

## 周恩来死後の中国と日本外交

—あわてず 急がず 落ちついて—



〈米中共同声明に署名する周恩来〉

〈出席者〉(敬称略五〇音順)

東京外国語大学助教授 中嶋嶺雄

評論家 鍋山貞親

本会常任理事 矢次一夫

(二月一三日本会事務所にて)

## 周恩来と宮本顕治

矢次 (鍋山氏に) 周恩来といえは、日本で彼の若い頃を一番よく知っているのは君だね。何しろ、かつて上海で青年周恩来と一緒にオルグ活動をおったんだから……。

中嶋 面白いですね、その辺のお話を伺うのは。周恩来の死以後、彼についての報道その他をみていると、やや栄光の場面が出てきすぎるような気もしてね。あれほど政治的に計算された行動に終始した人物として、そういう側面ばかりであり得るはずはないんですね。

鍋山 周恩来が死んだのは八日、それが九日に公表されて、日本では夕刊がいずれも五〜六頁を費していた。共産党の「赤旗」は一〇日、三段抜きでちよこつと事実だけを報道し、そして第六面で周恩来の経歴をベタで簡単に伝えていたのだが、その最後のところで、中国における周恩来の功績は一応評価しておるんだけど、しかし、一九六六年に日共と中共の会談が行なわれて、共同声明ができ上がり、周恩来自ら音頭をとって乾杯したにも拘らず、その声明内容が毛沢東の反対にあうや、そんな合意はなかった、知らんといつて、シャーシャーと嘘をつき、そして日共の攻撃をしたこの事実は、やはり彼の中国における功績とは別に忘れちゃいかんということを、わざわざ書いてあるんだね。

そこで思い出したのだが、ご承知のように、周

恩来は中国の政治において、歴史を通じ主役を演じたことはほとんどないんだね。だからその意味において、中国の政治をリードしてきたとはいえず、一つの方針に基いて物事をまとめてきた人であり、その限りで大きな成績をあげたのだが、しかし人物はきわめて冷酷無惨な男だよ。たとえば、周恩来の伝記などにはちよつと出てくるものも、昔、上海で顧順章という黨員が国民党に寝返って、その当時の中共幹部だけでなく、コミンテルンの極東ビューローのヌーラン等も逮捕されるといふ事件があった。

中嶋 たしか政治局員候補ぐらいの、かなりの人物でしたね。

鍋山 そのときに、顧順章に対する報復として、周恩来は顧順章の一家眷族ごとくを殺し、家を焼き払ってしまった。周恩来にはそういう残忍なところがあるし、そしてシャーシャーと嘘をいう。それで、ぼくはまた宮本顕治をちよつと思ひ出したんだ。宮本もシャーシャーと嘘をいう男だ。いま「文芸春秋」に載っている立花論文(日本共産党の研究)に対する共産党の反駁をみても、シャーシャーと嘘をいっておる。そして、かつてのいわゆるリンチ事件でも、仲間をほんとうに殺したかどうかは別として、殺したとみられるような行為を平気でやる。宮本は周恩来ほど眉目秀麗ではないし、一度会った人をたちまち魅惑するような魅力性もあるかどうか知らんが、非常



—左から鍋山、矢次、中嶋の各氏—

に似たところがある。だが、宮本は日本では少なくともナンバー・ワンとして、これまで共産党をかなり長い間ずつとリードしてきている。周恩来はナンバー・ツー以上に出ないわけだからね。

### 毛より先に死んでよかった？

周恩来は、個人としてはいいときに死んだと思う。首相の現職のままね。そして、とにもかくにも文革以後の調整段階における一つの方向を定着せしめてね。一身の栄誉をになったままあの世へ行ったわけだからね。これももし、毛沢東と逆になつておつたらどうだろうか、そりゃもう大変なことになつたんじゃないかという気がする。毛沢東が先に行つちやうって、周恩来がその毛沢東のあとを收拾しなくちゃならんような立場だったら、これは大変だろう。しかし、そうじゃないから、内外政治、周恩来が死んだからといって、急にはそう大きく変らなと思う。

矢次 明治維新でいうと、西郷が生き残つて大久保が死んだということだね。彼は大久保的な人物だったんだろうか。

鍋山 さあ、周を大久保的人物といえるかな。

矢次 プラグマチストなのか、オポチュニストなのか…。

鍋山 日本人で周恩来に会った人は、みんな彼のことを知日派で親日派だというらしいんだが、アメリカ人もそう思うらしい、親米派だと。親日、親米、親英、親独、会う人の誰をもみなそう思わせるんだから、大久保利通なんていうところはいいですな。もっと厳しいね、大久保のほうが。

矢次 確かに厳しいし、大久保は原則論者だね。

鍋山 けさね、テレビをみておつたら、告別式に朱徳以下、党の要人がみな参列し、毛沢東も王洪文も出ていたが、江青が全然出ていないね。だから、やはり何かあとに、政策上の方向を急に変わるようなことはないだろうが、文革いらい今日まで鬱積しておる、権力中枢における権力闘争的な要素は、なかなか消えないんじゃないかな。

### 毛批判のタネが消えても一安心

矢次 これはどうだろう、毛沢東というのはいまや空気の如き存在になつてしまつて、現実的な政治、政策指導の面は、周恩来がもつておつたか、周恩来のグループがもつておつたといつてもいいんじゃないかね。毛沢東は、いわば象徴的人物になつてしまつているんじゃないかな。

中嶋 その辺が一番難しいところなんです。空気のような存在であることは事実ですが、それがないと人間が死んでしまうといった意味での空気のごとき存在で、やはり決定的な存在だといふ気がしますね。だから、私は逆に、この一年ぐらいはむしろ周恩来が、単に病気になったことだけではなしに、政治の実権からタナ上げされていたような気がする。これは批林批孔運動から水滸伝批判までの経過をみてるとね。どうもここ二、三年、周恩来的なものに対する風当たりがかなり強かつたんじゃないかという気がするのです。

そういうふうになると、周恩来の最後の政治的な場というのは、近いところでは七三年八月の一〇全大会、ここで周恩来ががんばつた。つまり、脱文革の流れ——旧幹部の復権などで文革からゆれ戻す潮流をつくつて、そして彼がそこで政治報告をした、これが一つのピークだったと思うのです。ところが、その周恩来に対して王洪文の報告というのは、いわば反潮流を鼓吹し、そして一〇全大会が終わつたあとから批林批孔の運動が起つたわけで、それいらい周恩来は守勢に立たされていた。そして、昨年一月の第四回全国人民代表



大会では、辛うじて彼はそこで演説をして、いわば周恩来的なものを提起したけれども、一方では文革派の主張なり行き方も憲法の中に取入れられたりして、そこにいわば妥協が現われたのですが、どうも周恩来はその辺から、自己の路線を政治的に大きく党内に伸ばしていくという立場であるよりは、むしろ一步退いて、病気ということもあって次第にタナ上げされていったと：

矢次 病気はほんとうだろうかね。

中嶋 それはほんとうだろうと思う。写真の顔を見ても、いかにも病気であるような顔だったし、病院で彼に会った人の話からも、それはその通りでしょう。それで、そうであっただけに、たとえば日中平和条約の覇権問題なんかをみても、もしあれを周恩来が担当していれば、もうちょっと違う手が打てたと思うんですよ。つまり、あんなにまで「覇権」にこだわらずに、ここで平和友好条約を結んだほうが、日中関係のみならず、中国として対ソ戦略上も好ましいことは目にみえていっているわけですが、あそこまで中国側がこだわっているのは、やはりあれは周恩来が担当したところじゃないかと思う。だいたい日中折衝に出てきているのはその辺のところですね。それでまあ、



— 中共党10全大会主席台上における、左から王洪文、毛沢東、周恩来 —

周恩来ほどの芝居が打てないというところがあるんでしょ。私はね、鍋山先生のいわれた、周恩来はいとときに死んだ、毛さんより先に逝ってよかったというのには、なるほどそうもいえると思うんですが、ただね、いまの中国の政治体制の中で、周恩来の政治指導者としての最後というか晩節は、どう

もあまりかんばしくなかったような気がするのです。もし彼が健在であれば、毛さんが亡くなったあとは、環境なり状況は周恩来に有利な方向にだんだん展開していくのですから、時の流れとしてはそうなりつつあるのですから、毛なきあとの周政治というものを一べんみてみたかったと思うんです。その点で周さんも、いろいろな考え方をもっていたはずなので、非常に無念だったと私は思うんですよ。つまり、ある意味では毛沢東批判みたいなことがあり得たかも知れない、毛が先に死んでいけばね。ところが、それがなくなっただから、毛さんはある意味ではホッとした、ということもいえるような気がする。

鍋山 それはあるね。

矢次 それはたしかにいえる。そういう面はほくも感ずるな。

### まとめ役なき集団指導制は難しい

鍋山 周恩来ならば、あとの権力闘争の要素だけをとって考えても、彼に対して怨み骨髄に徹するような人はおらんからね。毛沢東の場合にはそれがゴマンとおるわけだ。

矢次 それに、中国共産党の歴史でみても、毛沢東よりも周恩来のほうが先輩だったんだね。それがああいふふうにつねにナンバー・ツーの立場ですつときたというのには、共産党内部のいろいろな事情があったと考えられるが、それにしても、ナンバー・ツーに周恩来をおいたという一つの環境と条件が、彼が死んだあとで党内闘争に転化するだろうという感じはするね。明治維新を考えてみても、さかのぼってロシア革命をみても、あるいは辛亥革命のあとの経過をみてもそうだが、あれだけの大きな独裁国家で、しかも複雑な人事構成のところ、ああいふ中心人物が一人コロッと死ぬと、そのあとの指導部の編成には相当大きな犠牲を必要とするね。これは過去におけるすべての革命の歴史が証明している。まあ中共の場合、毛沢東がおる間は、いくらかそれが穏やかにいいうか、あるいはスローに進むかも知れんが、毛沢東ももうそう長くはないだろうし、それに仮に生きておっても、ますます歳をとって指導力は非常に低下していくだろうから、やはりこれからの中共は、内に八億の人口をかかえて、いまの政治・経済をうまく運用していくのは、あとに周恩来は

どの人物もいないようだから、なかなか骨が折れるだろうね。集団指導制なんてよくいうけれども、集団指導制というのは自民党みたいなところで可能性があるのであって、共産党みたいなところで集団指導制というのは、ほくはあり得ないと思うがね。

鍋山 長続きしないね。

矢次 並みはずれたやつが一人でやってこそ、うまくいくんだよ。

鍋山 だから、毛沢東が生きている限りは、彼のカリスマ的権威を政治に大いに用いなければいけないし、またそうしているわけだ。しかし、一〇全大会にしろ人民代表大会にしろ、あそこでの周恩来路線というものは、やはり国内建設を主眼にしている、とにかく近代国家的な諸条件を整えるためのいろんな計画を打ち出しているわけだが、これは中国の党としても政府としても、そう根本的に変えることのできない路線だと思う。

その意味では、周恩来が亡くなっても、周恩来がずっと敷いてきたレールは、そう大きな軌道修正はなく続けられる。ただ、そこに中枢の権力闘争的な要素が結びついて、いろいろ振動が生じたり、混乱が起こったりすることがあり得ると思う。

### 情けない三木総理の属国的態度

矢次 そこで、中共内部のことは、今後どうなるのか、他の国のことだし、見当をつけることも難しいが、日本として今後どういう態度をとるかということだな。こっちの立場で向こうの状況を眺めてみるときに、さだめし複雑な、予測し難いいろいろな問題はあろうけれども、そうであることを前提にして、当面の問題としては日中平和条約の問題がある。そこへちょうど、たまたまか計画的かは知らないが、グロムイコが来日し、きょう帰るわけだが、これが日本に残っていたさまざまな問題を考えてみると、日本の外交というものはここで実に大きな、難しい問題をかかえてしまった。そこから周恩来の死というものと、その影響を考えていくのが一番じゃないかな。

中嶋 たしかにそこが一番大事なところだと思わうんですが、さきほどお話に出たように、日本の新聞は周恩来の死をあまりにも大きく取扱いすぎで、グロムイコ訪日なんていうのは二〜三段の、

こんな小さな記事なんですな。

矢次 蒋介石が死んだときの新聞記事と比較しても、周恩来のはバカに大きい。

中嶋 そうなんです。こんなことだと、毛沢東が死んだときはどうなるのか、日本の新聞はどうするのか、まさか他のニュースを全部落としてしまつてというわけにもいかんしね(笑)。そんなことも考えてしまうほどで、日本の新聞も最近はいろいろな点でだいぶよくなったとはいえず、依然としてそういう懸念をもたざるを得ないので、私はもう一つ、非常に心外であり、少し悲しくなったのは、三木(総理)さんが葬儀に出たいということ、いままでのしきたりも十分調べず、相手の反応も考えないで、もう腰をあげてすぐにも飛んでいきたいようにして——しかも先方が難色を示してきたあとでさえ、受入れてくれるのなら葬儀の前にも訪中して弔意を表したい、と。日本はこれから、中、ソとの三角関係において、好むと好まざるに拘らず国際政治の攻防の一角をにない、たとえ多くの非難や妨害に出会おうとも、アジアにおいて必要な手を打ち、その責任を果たしていかなければならない重要な国なんです。そういう国の宰相としては、ほんとうにどうかと思うような態度だった。

その上に、あれは一応もち回り閣議で諮ったというんですが、あの総理談話です。ごらんになったと思うが、あれはまさに朝貢国に対する属国の誓いのようなものですよ、言葉づかいといひ内容といひ……。しかも最後に、今後毛主席閣下のもとで、日中平和友好条約の締結に万全を期して努力することを誓います、というふうに結んであるわけでしょう。そこまでいう必要があるのかというと、全く必要ない。弔意を表ささえすればいいではないですか。そういう点でも、これはやはり日本自身の問題ですね、どちらかというと。

矢次 歴史を数百年あとに戻して、室町將軍足利義満になつちやつたわけだ。(笑)

鍋山 日本はいま、中ソの対立に巻き込まれなれといつても、すでに巻き込まれているんだ。だから、いやでも巻き込まれているという立場を自覚して、その上で両方に対してどう対応すべきかということだね。心情的にはどうしても、流れは親中のに固まりやすいんだよ、国民感情からいってもね。だから、政治の方向もついその方向にな



ってね、中ソ対立に巻き込まれて、中国的立場に日本がより深く入っていくという恐れがあるんですよ。だから、それをとくに強く警戒して、覇権問題の絡んでいる当面の平和友好条約問題を取り上げていかなくちやいかん。

### 心情的中共派に自重を求む

矢次 明治維新以後をふり返ってみると、日本が大陸に足をふみ込んだことでロクなことがないんだね。

鍋山 日本の国内の政治的混乱は必ず大陸からくるんだ。



矢次 まあここ一〇〇年に限らず、もっとさかのぼって王朝時代からの歴史をみても、ロクなことはないという感じがぼくにはする。といって、足を踏み入れんわけにはいかんし、手を出さないわけにはいかない環境におかれてるのだから、問題は、どういう手の出し方、足の入れ方がいいのかということ、いい機会だからここで日本として深く考えるべきではないのかということだね。(大陸に対して) 知らん顔もできないことは明らかだからね。これまでは、王朝以来の大陸関与の歴史を考えてみると、ほんとうにロクなことがない。もうたくさんだということだね。

お話のように、三木総理あたりは足利義満になつてしまったような感じで、恐れ入り恐縮して、低頭平身したような姿勢をとっているんだけど、いまの日本の環境をざっと見渡すと、たとえばインドシナはいずれでもソ連の影響が非常に強くなりつつあり、むしろ中共の影響は次第に退化しつつあるという印象だ。ラオス、ベトナム、カンボジアはソ連の強い影響下にあるし、タイも、中共との間で米と石油のバーターをやってみたけれども、中共産石油の質があまりよくないので、これを断わってしまうような状況だし、フィリピンも中共承認にふみ切ったけれども、その後の経過をみると、必ずしもこれはフィリピンにとってプラスになっていないような印象だな。シンガポールやインドネシアは依然として静観する立場をとっている。ひと口にいうとそういう状況だ。し

かもソ連は、インド洋を初めとして各地・各域に進出し、しんしんとしてその影響力を強化しつつある。そういう背景をふまえてグロムイコが日本にきた、そして中共のほうでは周恩来が死んだという、この状況において、日本はこれらにどういう関わり合い方をするのがいいのかを考えてみると、ぼくはまず第一に日本の心情的中共派の諸君に自重を求めたい気がする。

### 日中条約締結はあと三年ぐらいい待て

それから、グロムイコは運のいい男で、彼が日本にきたときに周恩来が死んだことで、日本の心情的中共派に対して働きかけ、日中間にクサビを打ち込む上でのより大きなチャンスをつかんだともいえるわけだが、しかしソ連がどう出ようと、日本として北方領土問題を諦めるわけにもいかず、日中関係の進め方をソ連の顔色で決めるわけにもいかない。ではどのようにすべきか、これからの問題になるわけだが、ただ、いわゆる等距離外交も難しいといういまの状況の中で、はっきりしていることは、日本はアメリカのように中ソ関係のある程度コントロールしたり、中ソ対立を利用してうまく立ち回るといった立場にはいないし、それだけの力はない、だからそういう戦略外交みたいなことはむしろ考えないほうがいい、ということだと思う。

鍋山 心情的親中共派に慎重さを促がす上で、当面の最も具体的な問題は、日中平和友好条約をどう扱うかという問題だ。三木はこれを自分の在任中にぜひとも成立させようと、ほとんど公約に近い発言をしている。そしてまた、これを何か選挙の目玉商品にしようとする考えを持っているんですよ。これは非常に危いことで、これは当面の問題ですよ。単なる傾向じゃなく、政府として権限をもって処理し得る問題だからね。だから、これについては声を大にして、とくにいまは慎重たるべしと警告をする必要がある。

矢次 中ソ友好同盟条約の期限はあと四年だったな。

中嶋 八〇年の四月一日のはずです。廃棄するときは一年前にその旨を通告しなければいけないわけだから、廃棄か存続かが決まるのは七九年の四月、あと三年です。

矢次 だから、三年後におけるこの中ソ友好同

盟条約の取扱い方をみるというのも一つの方法だし、あるいは覇権問題をめぐっているいろいろな議論があるのなら、同条約における対日条項の撤去を求めるといっても、一つの行き方、姿勢かも知れぬ。

中嶋 そうですね。

次次 ぼくは、(日中条約は)あわてて結ぶことはない、むしろ静観自重して、ここ三年ぐらいは待っていたほうがいいと思う。

### 中ソ問題では対米同調もほぼほぼ

中嶋 つまり、あと三年間は、中ソ友好同盟条約がどうなるか、すなわち中ソ関係がどうなるかということとは、大きな不可測性を残しているわけで、これは日本の将来のために大変な問題だから、そういう不安を残して条約を結ぶことのリスクは避けるべきだということ。それと同時に、いまから三年後には、毛さん



亡きあとの中国の問題がいろいろ出てくると思う。だから、そのときまでは中国がどう変わるかということとはよくわからないから、しばらくはじっくり構えて、そこを十分見極めていかなければいけないということだと思う。

私は、日本はどうも今年あたり外交的に非常に難しくなると思うのは、アメリカが、ヨーロッパ・大西洋を舞台としては、米・欧・ソを軸とする、全欧安保会議からSALT2に至るいわゆるデータント外交を依然として崩さない、いろいろな曲折はあるがおそらくそうであろう。そうすると、その米・欧・ソを軸とするデータント外交を有利に展開するためにも、アメリカはアジア・太平洋地域においては、米・日・中の連携をむしろ求めてくる。この間の「新太平洋ドクトリン」がそうです。

それで、あれに対する反応をみると、面白いのは、ソ連はすぐ反撃したが、北京は今日に至るまで黙っていること、これはつまり賛成していることです。フォード訪中後に出たもので、北京にとってはこれこそ反覇権連合になり得るわけで、対ソ戦略上、非常に都合がよいとみています。ハノイとピョニャンは意外に早くこれに反応

した。両方とも即座に反対です、太平洋ドクトリンにはね。けしからんということをや非常に強くいった。これは、中国が沈黙しているのに対して、非常に象徴的なことです。いまのアジアの社会主義勢力というものが、いわれたようにソ連の影響下にあるということをや、これは示していると思うのです。

そうすると、日本にとって日米関係は非常に重要なんだが、こと中ソ問題に関しては、日本はアメリカにただ同調していればいいというわけにいかなくなる。アメリカの場合は、いわゆるスーパー・パワーとして、片や大西洋地域でデータント、片や太平洋地域では中国を含むわば反ソ的行動みたいな、太平洋ドクトリンに示されたような提起ができるが、日本はそういう二元外交もできない。中国のような二面外交もできない。ということになると、アメリカがソ連に対している角度と、日本がソ連に対している角度というのは、日本のほうがはるかに脆弱的な立場にあるから、たとえば「覇権反対」が米中の上海コミュニケにあったから、日本も同じではないかという形で、その点を全くナイーブに受けとめてしまったと同じようなことに、もし今後もなるとすると、これは大変なことになると思う。それだけに、日本の主体性、日本の独自の立場というものが出てこなければいけない。

それと、私はやはり、日本は今後アジアにおいて、こういう中ソ対立が不必要な余波、不安定をもたらさないために、その防壁にならないといけないという気がする、とくにASEAN諸国なんかに対して。そういう役割なり責務があるだけに、日本のほうからの積極的な対中ソ外交がもちろん望まれるわけで、いつまでも、北京に行っては頭を下げている状況でいることはできない。

そういう非常に複雑な、難しい立場にあるにも拘らず、どうも三木さんなんかの発言をみると、いつも内政上の考慮、たとえば総選挙があるからとか、新年になったからこれをやるとかというふうに、国際政治をみて外交を考えるのじゃなくて、いわば内側の思惑や内政的必要性から外交を考えているような気がする、これではいけないのではないかとこのことを痛感しているのです。

鍋山 それはたしかにそうだ。軍事力もなく資

源力もない国が、外交といったって、実質的立場において積極的に自らに有利な情勢をつくり出すというのは、非常に難しいのです。そこにおける外交の自主性とは何ぞや、非常に消極的にみえるけれども、情勢が有利になるのを辛抱して待つということだ。そういうことが、日本外交の自主性についての一番のカンどころだとぼくは思う。だから、ある場合には対米追従にみえたりすることがあるかも知れんが、情勢の有利さを待つために辛抱する、その辛抱する力だな。これがやはり、日本の外交にとって大事なことだと思う。

### 危ない三木のハッスル

矢次 それでね、さっきの続きだけれども、今年には日本と関係の深い国々のリーダーの交代期というか、非常に変動の多い年だね。

鍋山 政変の多い年です、今年は。

矢次 アメリカも大統領選挙の時期に入った。

ソ連だってブレジネフ体制がどうなるか、非常に流動性をもってきている。北京では周恩来が死んで、そのあとどうなるか、どういう指導体制ができるか。イギリスといえども、いまの政府がどうなるかわからん。

鍋山 西ドイツもそうです。

矢次 日本だってかわってもいいし、かえなくちゃならんかも知れない。

鍋山 可能性は大きい。

矢次 そういうときに、慌てたり、ちよっとしたきっかけでショック的な行動をとっちゃいけないということだけは、いえるのじゃないか。

鍋山 いえますな、非常に大事な点です。

矢次 日本人はどうもせっかちで慌て者が多いのだが、こういうときにはじっくりと腰を据えて物事を見極め、日本に有利な状況をたえず作り出さなければならんし、作り得たらそれを直ちにつかむという、非常に精密な計算の上に立った国際政治活動をやるべきではないのかな。

鍋山 その点で危惧を

感じるの、三木だな。



経済は福田（副総理）がやったのでね、三木じゃない。これは天下周知の事実でね、三木は経済はやれないのだから。それか

ら、党の近代化についても、椎名（副総裁）がイライラするほど三木はダメなんだね。つまり、三木は首相にはなつたけれども、いまだ何ら功績を残していない。だから中共との条約を焦る…。

矢次 彼はオポチュニストだからね。

鍋山 それがあるから、ぼくは非常に危惧を感じてますよ。

矢次 流れの早い川で筏に乗っているようなもので、まごまごするとどっかへぶっつけそうな感じがしてしょうがない、というのがこの男で、非常に軽率だし、表裏反覆つねなき小党派の権謀術数家だし、そういう男が今日の国際政治の変調期に日本のリーダーであるということは、日本にとって非常に不幸だという感じをぼくは前から持っていて、いつもそれを言っておるんだよ。要するに、エンジンのない「帆かけ舟内閣」だということだね。風のまにまに、波のまにまに漂いながら、小ざかしいことを考えてはいかんという感じがしてしょうがない。

鍋山 慎重に考えると、国交正常化とか条約成立は、それ以前ならば売りものになるけれども、成立させてしまえば大して魅力がなくなってしまうんですよ。だから日中国交正常化をやった田中が、これと違って選挙をやつたら、非常に不成績で終わったでしょう。社会党でも自民党でも、日中問題に熱中した連中が、いわゆる正常化ができたとなんに落選している。

たしかに、できるまでは人をひきつける何物かがそこにある。しかし、できてしまえばもう用はないんだな。そういうことを考えれば、三木も、言うのはいいけれどもやっちゃいかんとぼくは思うんだな。

中嶋 最近、その点では国民もかなり冷めてきていますしね、一時ほどのことではない。「朝日新聞」の一月四日付の社説なんか読んでそれを感じますね。そういうことからしても、三木さんの思惑というのはいかえって外れるのじゃないですかね。

矢次 イギリスでも戦後、第二次世界大戦で幾多の国難を救ったチャーチル内閣を潰すのだからね。国民というのはどだいそういうものだということをお教わつたのだが、日本人も一時の中共ショックから立ち直り、ようやく平穏にかえってきた。



アジア協調に主体的努力を

矢次 そこで、もう一つ、いまの国際政治環境を考えると、詳しい内容はまだ知らないが、今度フォードの打った弔電の中で、これを機会にもう少し積極的に米中関係をすすめるようなことをいっただという話があるが、ここで出てくるのが、台湾の問題だな。蒋介石が死んだあとの台湾をみると、非常に経済国家として安定しつつある。強い政治的国家としての台湾ではなくって、安定した経済国家という方向が定着しつつある。これは台湾のために非常にいいことなんだね。アジア外交における孤立の中に、台湾自らは経済国家として立国する道を歩んでいる。中共の内部が政治的流動性を持ち出したことと対照してみても、これから日本がアジア外交を進めるに際して忘れてならん点だと思ふね。

次に韓国だが、フォードのこの間の太平洋ドクトリンね、たしかにあの裏には中共との間に朝鮮半島の将来について何らかのかなり具体的な話合いがあったに違いないと思う。そして、中ソ対立が次第に定着し、長期化するという情勢判断の中で、北鮮の諸君も次第に、中ソから等距離の立場に自らをおいて、それに自主的に対処しようという傾向がいまだんだん出てきつつある。いままでも南との間に激しい対立を続けてきたけれども、金日成が南との対話を狙ってどういいうプラス、マイナスになったかをきわめて大づかみに計算してみると、結局、金日成が笛を吹くと金大中が踊るといふふうな形を一つ作ったことは、対南外交にマ

イナスではなかったといえる。ところが、その金大中のダンスにもなって、朴政権が国内体制を強化した。これは南にとって大きなプラスになったが、北にとっては乗ずべき一つのチャンスが失なわれ、南北対話を続ける意欲を失ったことは一つのマイナスになった。国連において去年、南北両決議案が通り、引き分けという形に終わったけれども、これも北から見ると、その思惑からはかなり外れてしまった。そして、フォード訪中によって太平洋ドクトリンが生まれ、北が独断的な軍事行動もしくは強い意味の政治行動をとる可能性は、中共とアメリカの話し合いで一見封じられたような形になったことも、北にとっては決してプラスにならなかった。

こういう一連の動きをみると、朴政権とは口もきかないとか、金日成とは話もしないとかという南北双方のリーダーたちの考え方というものも、このままでは少しも進展しないで終わるかも知れないし、こういう中では、北も南も経済的な発展、踏み込んだ政治的な行動は望みにくいという状況が生まれつつある。しかしその中でも、南のほうは一応国内体制の整備と強化を終わったという立場で、対中ソ関係の改善に乗り出すことで北の政権に対する孤立化というか、優位性をアジアにおいて確立しよう、少なくとも朝鮮半島においてヘゲモニーを握ろうという努力の方向へ動き出したという注目すべき傾向があるんだね。日本はこれに対してどうするのかという問題が一つ、ここで当然起こってくる。

私は、この前、日韓協力委員会のときにいった



本社・東京都千代区有楽町1-12-1  
電話(211)71111大代表



日興電機工業

社長 後藤 太郎

本社 東京都大田区東六郷 1-12-11  
電話 東京 (738) 6 1 8 1(代表)  
泰野製造所 神奈川県泰野市菩提  
字東原 9 0 番地



のだけれども、日本はやはり南北間にコトが起これば、日本の国内からアメリカの軍事行動が開始されるという立場におかれている。その立場において、朝鮮半島の南北対立をただもう自然の成行きに任せておくというのではなく、やはりこの地域の平和と安全を推進するに必要な努力を、その立場で行なっていくなければならぬ。その環境づくりに努力すべきではないのか、ということですね。これは南の諸君からも別に反駁をうけなかったね。そういう問題も、今年は日本の外交の一つの大きな課題として出てくるのじゃないか。

東南アジアの状況をとっても、日本経済が回復しない限りはなかなか、この地域に対して何らかの経済協力をしていく可能性は乏しい。しかし、アメリカの景気が回復すれば、まっ先に韓国なり台湾の経済が回復するでしょう。好転する可能性もある。そういう国々の好転は日本の好転にもつながるわけで、今年下半期は日本の経済協力活動もかなり進みうる条件が揃いそうだから、日本は、それぞれの国の実情に応じて、日本のアジアにおける地位を安定し、アジア全体の中で日本がもう少しイニシアティブを持ちうるようなアジア諸国との協力関係を作り上げるための足固めをしながら、一方、中共とソ連に対して打つべき手は打ち、つかむべきチャンスがあればつかむということが、今年という年の課題じゃないかという気がぼくにはするんだがね。

### 注目を要するブレジネフ体制の行方

鍋山 もう一つつけ加えると、二月にはソ連共産党大会が開かれるね。ここでブレジネフ体制が維持できるかどうかが依然としてまだ世界の注目の的になっていくが、仮に維持できたとすれば、まあまあ現状維持的な妥協の結果だと思うが、しかし、ひょっとしたら変わるかも知れない。もし変わると、中ソの対立関係に急激な異変とはいえないまでも、これがよりシビアなものになるのか、緩和の可能性を導き出すのか、これがぼくは日本の中ソ両国に対する外交上の注目すべき点だと思うね。

たとえば、去年八月に「ブラウダ」に出たザプロフという人の論文ね、あれはス羅斯ロフ系統らしいが、ああいう強硬な議論と、グレチコ(国防相)その他の軍の首脳部が政治局内ではタカ派として

ブレジネフを相当牽制してきたことは事実なんだ。去年七月のヘルシンキにおける全欧安保協力会議の宣言は、いままでのところはソ連有利ということになっている。アメリカは外交力の低下という弱味もあって、すっかりこれにしてやられていくわけだな。たとえば、ポルトガルはちょっと落着いたけれども、いまアンゴラにだいぶ熱気がこもっている。これでは、アメリカとしても手をこまねいておれんという空気がいずれ出てきますわね。だいち、アメリカはソ連の弱味を一つ握っている、ソ連の穀物の大量輸入というやつがあるからね。ぐずぐずいえば兵糧攻めだという手がある。アメリカ国内の市民感情からすると、緊張緩和でソ連ばかりがうまいことしやがって、こっちはいつも後手、後手だ。ソ連に大量に穀物を買われたお陰でわれわれのパンの値段まで上がるのは我慢できない。そんなのはやめちまえ、という庶民的議論がアメリカでは起こりやすいのだな。

ここでソ連首脳部の陣容いかんによっては、ぼくは米ソの緊張緩和も今年は決して安泰とのみはいえないと思う、ヨーロッパだけをとってみてもね。アジアはまだまだ海のものとも山のものともわからんけれどもね。だから、これからソ連首脳部がどう変わるかに非常に大事な一点があるような気がするんだ。

矢次 日本の新聞をみていると、中ソ対立というものが緩和されることを希望するような書き方をしているが、アメリカは中ソ対立があることを前提にして、アジア外交を進めているな。

中嶋 そうですよ。すべてのアメリカの対外政策はそうですね。

矢次 それがタインするとか、あるいはなくなることになったならば、アメリカの対アジア外交は急転するだろうということを考えておかなくてはならないと思うな。

それから、前にちょっと話したことがあるけれども、一一月の中頃だったか、「次の戦争でアメリカは生き残れるか」という「ニューヨーク・タイムス」の記者が書いた本を中共の新華社が取り上げて、本国に電報を入れているんだね。それを、ここに持っているけれども、「中国通信」が要点だけを載つけたのだ。それを見て、そういうものを出した「ニューヨーク・タイムス」の意図もさることながら、それを直ちに打電した新華社

の記者の頭の中も非常に興味があったな。記事の  
中味は要するに、アメリカは生き残れないだろう  
ということなんだ。ソ連は核兵器を使うことなし  
に通常兵器で、大戦軍と大空軍とでヨーロッパ  
をおよそ八週間で制圧できるというんだ。NATO  
の敗残軍はピレネー山脈に立てこもって、わず  
かにゲリラ戦か何かで抵抗するに過ぎないだろう  
ということだな、一言にしていうと。アメリカは、  
たとえばイギリスが第二次大戦の最終段階でドー  
バーを越えて進撃したような器用な立場に置かれ  
ていない。大西洋というかなり大きい海を渡らな  
ければ軍事援助はできない。しかも、ソ連が核兵  
器を使わず、したがってアメリカも使えないとい  
うような環境を巧みに作りながら、ソ連は疾風迅  
雷のごとき軍事行動をとるだろうと。加えて戦機  
をつかみ、戦局をリードする立場はソ連にあって  
アメリカにはない。こうなると、アメリカは結  
局、孤立せざるを得なくなる、簡単にいえばね。  
そういうことをこの本は書いているんだ。

これはだいたい議論があって、フランスや西ドイ  
ツが核兵器を持ちたり、あるいは国内に置きなが  
ら手をこまねいてソ連の蹂躪にまかせることはな  
いだらうという見方もあったり、いろいろあるの  
だけれども、しからば第三次大戦はあり得ないの  
かという点、あり得ないという結論が誰にもはっ  
きり下せないという状況の下でこれは書かれてい  
るということ、やはり考えておく必要があるよ  
うな気がするんだね。

ことしソ連の首脳部が変われば、それから、中  
共の首脳部だって変わり方によっては、何ともい  
えない、いまのデータもね。

### ソ連は鄧小平に期待？

中嶋 中国はいま、とにかく第三次世界大戦は

必ずあるということをいっていますね。本音と外  
向けはあるいは違うかも知れませんが、と  
にかくそれを国内教育としては盛んにやっていま  
す。だからそういう点で、いまのデータという  
のは、三〇年代のミュンヘンだということ、盛ん  
にいい、警告を発しているんですね。実は私は来  
月、科学アカデミーから招かれてソ連に行くん  
ですが、そのへんのところをどうみているか、じっ  
くり聞いてみようと思っっているんです。

そこで「中ソ関係」ですが、たしかに、かつて

はソ連は周恩来に期待してましたね。それが一  
〇全大会あたりから、周恩来もソ連にかなり厳し  
いことをいい始めたから、最近はその期待も薄れ  
た。ただ、ソ連はご承知のように、鄧小平に対し  
ては非常に複雑な見方をしていると思うんです。  
鄧小平というのは中ソ論争の第一線に立ったいや  
なやつという気持が一方にあると思うんですね。  
これは確かにそのとおりです。鄧小平が復活でき  
たのはまさに中ソ対立があればこそという面もあ  
った。

ところがもう一方で、ソ連にとって鄧小平はま  
だわからない人物だということで、期待をかける  
面があるのではないかと私は考えているんです。  
それは、鄧小平というのは戦略的には、毛沢東の  
ようにソ連と人民戦争をやるという行き方ではな  
くて、羅瑞卿のようにアメリカ帝国主義に対して  
はソ連とも統一戦線を組むべきだという戦略です  
よね。実権派というのはそうなんです。ですから、  
論争はやるけれども、ソ連はやはり社会主義  
の一員であり、やはりアメリカ帝国主義に対して  
は共に統一戦線を組むべきだ、という考え方で  
す。その範囲内におけるソ連との論戦だというの  
が、鄧小平の対ソ観だったと思うんですね、少な  
くとも文革のときまでは。それで毛さんと対立し  
たわけだから。そうすると、鄧小平がもし今後、  
中国で力を伸ばし、やがて毛さんが亡くなったと  
いう状況になったら、ソ連はかなりいろんな手を  
使ってくるだろう。それが、鄧小平に対しては一  
言も悪口をいっていないソ連の一つの理由ではな  
いかという気がするんですが、どうでしょう。

鍋山 それは、ソ連からみれば、鄧小平とはああ  
いう路線論争のいきさつがあったが、やはりなん  
といっても一番の強敵は毛沢東だからね。その毛

心のふれあいを  
大切にします



第一勧業銀行



沢東に一ぺん退けられた男だからね、鄧小平は。そこに何かがあるのかも知れない。あなたのいわれたとおりだ。

中嶋 そこに複雑なものがあるのではないかと  
いうふうに思うんです。これはおそらく日本共産  
党も、一連の動きからみてそういう気持を持って  
いるのではないかと。

鍋山 取り上げ方からみるとね。

矢次 そうだね、毎日配信してくるソ連のほう  
の通信をみておつても、鄧の悪口はあまりいつて  
おらん。すぐに変わらなくても、そう気にするこ  
とはないということだろう。

中嶋 つまりソ連も、まあ日共もそうですけれ  
ども、あれだけはっきり「毛沢東一派」といつて  
いるところに…。

鍋山 なお融和し得る可能性は残っているわけ  
なんだよ、実権派にはね。

矢次 そこらあたりはなかなかキメ細かくソ連  
もやつておるね。

中嶋 だから、日本もそこまで十分みた上で対  
中ソ外交を考えないとね。人のいい考え方でやつ  
ておつても、向こうにうまく通じているとは限ら  
ないから…。やはり政治はダイナミックスで動き  
ますから、ある朝、目が覚めたら、そういうこと  
になっていたということにならないように…。客  
観情勢の中でそうなることもありますからね。

矢次 もう一つ、ソ連の通信を見ておつて前か  
ら気になっていたんだが、日本の政治家に対する  
個人的な評価があまり出てこないね。今度もグロ  
ムイコは椎名に会い、中曽根に会い、福田に会い  
で、大体いちおう総理候補みたいなものにはひと  
通り全部会ったようだが、人物研究をしたんじや  
ないかな。大平は日本にいなかったから…。

鍋山 それはそうでしょう。

矢次 そして、どうせ三木は長くないという評  
価を、彼のことだからしているに違いない。田中  
角栄には会ったのだろうか。田中はソ連を訪問し  
て、領土問題についてはある程度風呂敷を戸棚か  
ら出さしてはいるんだからね。しかし、会ったと  
いうニュースがないな。本人が会わなかったのか  
も知れない。公の場所にまだ出ないという気持が  
強いから…。

鍋山 電話で連絡ぐらいいしたかも知れんけれ  
どもね。

### 相互関係の再編期に

矢次 さて、そこでね、今度は日本の国内態勢  
を考えてみると、自民党がこの二日に党大会を  
開くが、これはまあシャンシャン大会でね、おそ  
らく党内改革についても具体的な発展はないだろ  
う。次は社会党だが、これは三月だ。新聞もそろ  
そろ取り上げているようだけれども、協会派が党  
中党をなしているという形で、これが社会党の内  
部改革の一つの目玉になってきた。これははっき  
り新聞に出たからかまわんと思うが、佐々木派と  
江田派と流れの会の三つがほぼ一体化して成田執  
行部にあたるという形が、ようやく表面化してき  
たのだね。こうして野党再編成、とりあえず民社  
党との間の連携という形か、合同という形かが総  
選挙後には発展し得る可能性を持ってきた。公明  
党がそれにどう対応していくのかという問題が残  
るけれども、公明党はまあ宗教政党だから——共  
産党も一種の宗教政党とみてもいいわな、いわば  
マルクス教だが——これは後回しにすると、一  
応、社会、民社の統一をまず完成して、それから  
という手順を踏むのが一番賢明だろうという見方  
があるでしょう。こうして、日本の政局もイタリ  
ーの轍を踏まないようにしよう、イタリーの二の  
舞をしてはいかんという自重的な考え方は、共産  
党を除けば一致してきたのではないかな。そうす  
ると、ことしは国際的にも新しい次の四半世紀の  
第一歩に立つ大きな転換点だとみて、それぞれの  
態勢の整備と相互関係の再評価、再編成に入って  
いくということ、日本に限っていても同じこと  
がいろいろわけて、流れの大きな傾向としてはそ  
う悪くないね。

鍋山 そうですね。

矢次 そういう感じがぼくはするのだが…。

中嶋 環境としては十分有利な状況にあるわけ  
ですから、変に軽率妄動をしないことですよ。

矢次 それにね、中共の政治家も、ソ連の政治  
家も、ともに血の雨を浴び、敵味方の屍の山を踏  
み越えつつ戦いぬいた連中だから、ひと筋縄では  
いかんことを、肝に銘じて心得てかかることだ  
ね。彼らは、国益のためには「無慈悲なる闘争  
家」だから、甘く見ちゃいかんということだよ。

# 新国策

発行所

財団法人 国策研究会

昭和八年創立

□昭和51年を迎えて

「全治3年」の最終年に向けて……福田 赳夫

□座談会

周恩来死後の中国と日本外交……中嶋嶺雄／鍋山貞親／矢次一夫



	鉱工業生産		鉱工業在庫率		百貨店販売額		国際収支 (百万ドル)			企業倒産状況		労働争議			有効求人倍率		卸売物価		消費者物価 (東京都区部)	
	45年=100	前年同期比(%)	45年=100	前年同期比(%)	輸出	輸入	輸出	輸入	総合収支	総件数	1件当り負債額(百万円)	総件数	損失日数(千日)	季節調整値(倍)	45年=100	前年同期比(%)	45年=100	前年同期比(%)		
40年度	48.6	3.8	52.4	10.1	694	536	405	694	405	6,141	92	3,051	5,669	0.61	89.8	0.7	76.7	7.3		
45年度	100	13.8	100	20.4	1,580	1,251	1,374	1,580	1,374	9,765	75	4,551	3,915	1.35	100.0	3.6	100.0	7.2		
47年度	114.6	10.6	100.7	19.0	2,453	1,759	2,964	2,453	2,964	6,900	69	5,808	5,147	1.30	102.3	3.2	113.5	5.6		
48年度	129.3	13.5	89.9	25.6	3,246	3,179	Δ13,404	3,246	3,179	9,348	97	9,459	4,604	1.74	125.4	22.6	130.9	15.3		
49年度	117.2	Δ 9.4	136.4	18.9	4,779	4,438	Δ3,396	4,779	4,438	11,736	145	10,462	9,663	0.98	154.8	23.4	158.0	20.7		
49・7—9	122.0	Δ 5.1	128.6	22.4	4,899	4,378	Δ 601	4,899	4,378	2,745	166	1,380	126	1.09	155.2	32.5	155.4	22.6		
10—12	117.4	Δ 13.0	139.5	16.4	5,407	4,500	964	5,407	4,500	3,411	136	4,243	1,265	0.84	157.0	23.4	162.0	23.8		
50・1—3	102.8	Δ 19.4	161.3	16.1	4,320	4,050	Δ 690	4,320	4,050	2,771	130	1,030	168	0.72	156.1	7.0	164.4	14.9		
4—6	108.9	Δ 14.0	140.7	12.2	4,481	4,107	Δ1,085	4,481	4,107	2,772	117	6,230	4,139	0.65	155.8	5.0	171.6	14.2		
49・12	115.2	Δ 15.0	139.5	16.3	5,862	4,634	380	5,862	4,634	1,179	134	1,399	223	0.77	157.4	17.0	162.8	21.5		
50・1	97.1	Δ 19.2	178.3	16.6	3,616	4,198	Δ1,242	3,616	4,198	859	143	161	30	0.74	156.7	10.4	163.4	17.0		
2	101.5	Δ 20.5	165.2	15.1	4,358	3,753	254	4,358	3,753	889	112	241	26	0.71	155.9	5.8	164.0	13.7		
3	109.9	Δ 18.5	140.4	16.5	4,987	4,198	298	4,987	4,198	1,023	134	628	112	0.71	155.6	4.9	165.7	14.0		
4	107.5	Δ 14.9	140.0	13.9	4,739	4,094	Δ 412	4,739	4,094	929	115	1,764	1,615	0.73	155.9	4.3	169.8	13.4		
5	106.6	Δ 15.4	143.5	12.1	4,304	4,323	Δ 391	4,304	4,323	966	111	3,328	2,291	0.64	155.9	3.7	171.6	14.5		
6	112.7	Δ 11.2	138.0	10.7	4,400	3,905	Δ 282	4,400	3,905	889	124	1,138	233	0.58	155.7	2.2	171.6	13.7		
7	114.5	Δ 10.0	132.9	9.1	4,704	4,170	57	4,704	4,170	947	140	762	129	0.56	155.9	1.2	171.9	11.8		
8	106.3	Δ 7.2	146.3	9.8	4,325	3,809	Δ 268	4,325	3,809	977	277	294	41	0.55	156.8	0.7	171.2	10.6		
9	116.3	Δ 6.0	132.8	3.7	4,454	4,042	Δ 104	4,454	4,042	1,039	245	526	131	0.55	157.3	1.0	174.5	10.7		
10	116.0	Δ 3.7	134.7	10.1			Δ 798							0.53	157.9	0.8	177.6	10.2		
11		Δ 2.1	139.9	8.9			4 390							0.52	158.3	0.8	176.4	8.8		

〔資料出所〕労働争議の項は「労働省労働争議統計」、有効求人倍率は「同職業安定業務統計」より。他は経済企画庁統計より。〔注〕労働争議の項、年平均値欄は年間合計、2カ月以上にわたる争議については重複して現われるため、月別の数字の和は年平均値欄と一致しない。